

被災地ボランティア アで得た繋がり

人間学部コミュニケーション
シオン社会科学科2年

野口淳志



投稿者の野口さん

3月11日に発生した東日本大震災によって、多くの人たちの生活が一変してしまいった。僕は今までに2



佐々木さん(前列左から2番目)の自宅で大江友美さん(前列右端)共生社会科学科4年)野口さん(後列右)、細谷貴貴さん(野口さん隣)コミュニケーション社会科学科2年)

度、岩手県の大船渡市と陸前高田市へボランティアに行き、それを深く感じた。1度目は、ふじみ野市ボランティア団体の人たちと文京学院の学生約10人で、車で片道10時間ほどかけて被災地は、まるで違って

被災地へ向かった。震災からちょうど4ヶ月経った7月だった。震災直後は、まさか自分がボランティアに参加するとは想像もしなかった。しかし、実際に被災地の状況を肌で感じ、少しでも被災された方々の力になりたいと強く思ったので、参加を決意した。

7月の岩手県は、関東地方と同じで日中はずっと暑かった。新聞の写真やテレビの映像で見る被災地の状況と、実際に自分の目で見て

いた。目に入る情報全てが悪夢のようだった。いぎ土の上に立つとあちこちにゴミが溜まり、異臭を発生しており、ハエが大量に発生していた。衛生面はかなり心配されていた。家などもほぼ全てが全壊で、人がほとんどいなかったのを今でも憶えている。この町が復興するには何10年かかるのか……そんなことを考えていた。

ボランティアでは、瓦礫の撤去や、田んぼの草刈りなど力仕事ばかりだった。中でも印象深い仕事だったのは、一人暮らしの80歳の佐々木さんというおばあちゃんの家を掃除をしたことだ。佐々木さんの家は少し高台の上にある。しかし、津波は家の1階部分を全て飲み込んだらしい。そのため家は、泥などが入り、めちゃくちゃだった。家の掃除は半日かかった。佐々木さんは涙を流して喜んでくれた。その涙を見ただけで、僕はボランティアに参加して本当によかったと感じた。

そして2度目のボランティアのときに、2ヶ月ぶりに佐々木さんを訪ねた。まだ家には住めない状況だった。しかし僕のことを憶えていてくれた。今までにない感情で胸が熱くなった。最後に握手を交わして再び岩手県に戻ることを書いた。とても強い繋がりを感じた。2度のボランティアに参加して、人との繋がりはとても大切だと感じた。人は一人では生きていけない。助け合いの中でこそ、生きていける。これが日本人だと思う。僕はこれからもボランティアへ行く。すばらしい繋がりがまた増えるだろう。